
AとB

nin@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AとB

【Nコード】

N8631M

【作者名】

n i n @

【あらすじ】

AとBの会話文です。風景描写一切なし。

ギロリ。

「あんた殺したでしょ」

「さあな」

「嘘はなし」

ケラケラケラ。

「そうかもな」

はあ。

「軽く言う台詞？」

「俺には分からないな」

ふー。

「ちよっと外れてるよ、あんた」
ケラケラケラ。

「そうかもな」

「生活は大丈夫？」

「お前がいるから」

「――何よ急に」

「感謝だよ感謝」

かあつ。

「しょうがない奴ね」

「ああ」

「ほどほどにしてよ？」

「無理だ、これが稼ぎなんだから」

「……そうかも知れないけどっ」

「そうなんだよ」

はあ。

「捕まえられるのは嫌なの」

「誰が」

「――」

「誰が？」

ぽっ。

「……た」

「ん？」

かああっ。

「あんたよあんた」

「――」

「黙らないでよ、反応に困るじゃない」

「いや、俺も迷ってた」

「何を迷う必要があるって言うのよ」

「いや、そんなに思われてるなんてなあってさ」

「――！」

「サンキューな」

「べ、別にそんなんでもないし」

「ふーん」

「……バカ」

「じゃあ行ってくる」

「今日も殺すの？」

「まあな」

はあ。

「飽きないわね、もう」

「もちろんさ」

「ある種の衝撃を受ける返答に聞こえた」

「そりゃな」

「普通じゃないしね」

「そう言うことになるな」

「あっ」

「どうした？」

「夕飯どうする？ていうかお昼は？」

「昼は外で食うから」

「分かった」

「それってさ、もしや？」

「そうだなあ」

「……やっぱり？」

「血を浴びた後の一杯」

「うわ無理」

ふっ。

「何鼻で笑ってんのよ」

「笑うだろそりゃ」

「あつ、ひどーい」

「酷くない」

「嘘だあ」

「嘘じゃない」

「う・そ・だあ！」

「違うわ」

「うゝゝそゝゝだゝゝああああああ」

「うるさい」

「うう」

「何だその擬音」

「悪い？」

「いや」

「ならいいじゃん」

「だな」

「ま、いっか」

「じゃあね、行ってらっしゃーい」

「OK」

「おかえりなさいーい」

「ただいま」

「旦那さま、お風呂にしますか、ご飯にしますか？」

「……」

「どうしますか？」

「お前」

「それはないでしょ」

「ええ」

「まだ7時だけどそれでもええとか言うわけ？」

「だって俺性欲を持て余す青年」

「バカ」

パシン。

「ってゝはたくなよ」

「はしたないはしたない」

「いいだろ家なんだし」

「女の前でエロ話はないと思う」

「いやあり」

「あんたの常識ね」

「……そうか？」

「そうよ」

「へえ」

はあ。

「何か」

「何？」

「こんな奴と付き合うあたしって何なんだろうって思って」

「そっか」

「流すな」

「じゃあ言うけど」

「何？」

「でも好きなんだろう？」

「う」

「俺が手を汚したとしても好きなんだろう？」

「……うん」

「ああ、俺お前のそういう所大好きだ」

「き、急に何言うのよ、恥ずかしいじゃない」

「素直な方が——」

ぎゅっ。

「抱きがいもある」

「あ——」

「可愛いし、癒される」

「な、ちよっと」

「帰る場所を作ってくれる」

「は、離して……」

「やっぱり好きなんだな」

「はなしてよお……」

「——ん？ どした？」

「ど、ど、」

「ど？」

「ドキドキしちゃう……」

フツッ。

「じゃあもつと抱く」

ぎゅうう。

「うあ——っ！」

「好きだ」

「……あ、あたしも……好き……」

「今日は何人殺したの？」

「ターゲット含むで四人」

「……すごいね、あたしじゃ出来ない」
「どうして？」

「怖くなっちゃう、人を殺すのに」

「ああ」

「何でBは大丈夫なの？」

「昔からだから、慣れたんだな」

「……慣れるの？」

「まあな」

「そうなんだ」

「そんなもんだよ」

「へえ」

「あつ、でも」

「でも？」

「俺も最初は無理だったな」

「えっ、そうなの？」

「ああ」

「何で？」

「銃が打てなかったんだ」

「――」

「あれって、反動が意外に大きくてさ。子供だとミリタリーとかベレッタでも腕が反動を抑えきれないんだ」

「へえ」

「だから最初はナイフを練習してた。肉を切るナイフでも人を殺せるようにとか、技を当てるポイントとか」

「……信じられないよ」

「おはよ」

「……もう朝か」

「うん、今日はいいい天気」

「そっか」

「今日はお仕事？」

「いや、今日は休み」

「マジ!？」

「うんマジ」

「……そう……なんだ」

「……どうした？朝からきょんととしてさ」

「早く起こしちゃったかなって」

「いや、早起きは悪くはないから」

「元気だね」

「久方ぶりの休みだからな」

「だねー」

「……どっか行くか」

「へっ!？」

「二人きりでデートだ」

「ちちちちょっと急にな何を」

「だからデート」

ぽん。

「え、え、ちょっと待って、何で、どうしてそんな」

「暇だし」

「あ、あのあのあの」

「……落ち着け」

「――あ」

「そこら辺に遊びに行くだけだろ？」

「……うん」

「何を混乱する必要があるんだ？」

「いや、えっと」

「えっと？」

「嬉しくて」

はぁ。

「コーフンしすぎじゃアホ」

「あーアホ言ったアホー」

「言ったよ」

「じゃああたしはバカって言うー」

「で？」

「でって」

「だからで」

ふふふ。

ははは。

「だめだねあたしたち」

「そうだな、ダメダメだ」

「うん」

「ああ」

「……行こうよ」

「そうだな」

「ねえ」

「ん？」

「あたし、外歩くの久し振り」

「……そっか、ずっと家の中だもんな」

「うん」

「だから、嬉しい、あんたと一緒にいれて」

「――らしくないな」

「何、らしくないって」

「いや、いつものお前らしくないっていうか」

「ふーん」

「いつもならそんなに素直じゃない」

「何それ」

「事実だけど」

「ひどいよ」

「あー、すまん」

「ひどいよ」

「今日ぐらい、甘えたいの」

「らしくないな」

「いいじゃない」

「うーん、感覚狂う」

「え？」

「何か、改めてそう言われるとなあ」

「それでも言いたい」

「……ったく、好きにしろ」

「ねえ」

「何だ」

「今日は楽しかった」

「ああ」

「だからどこにも行かないで」

「ああ」

「あたしの前から消えないで」

「ああ」

「あたしより先に死なないで」

「……」

「あたしより先に死なないで」

「分かってるよ」

「ううん」

「普通な仕事してほしい」

「でもなあ」

「でも何」

「不自由しないためだ」

「それでもいい」

「……本当にか」

「うん」

「そうか」

「そうだよ」

はあ。

「分かったよ」

「何を？」

「足洗うわ」

「本当？」

「ああ」

「本当？」

「本当だよ」

「本当に本当？」

「そうだ」

「本当に本当に本当？」

「約束は破らないよ」

「本当に本当に本当に本当に本当？」

「本当だよ何回言わせたら」

「泣いてるのか？」

「えっ？」

「だって、涙」

「気にしないで」

「――」

「――ごめんね」

「ごめんって」

「ワガママ言っちゃった」

「……」

「一緒にいたいだけなの」 「それ以外は何もいらない」 「だから言
っちゃった」 「ごめんね」 「ごめん」

「――謝るなよ」

「えっ」

「謝って、ほしくない」

「――どうして？」

「笑っていてほしいんだ」 「いつまでも笑顔」 「お前に泣き顔は似
合わないよ」 「だから泣くな」 「こっちが泣きそうになっちまう」

「……な？」

「うん」

ぎゅ。

「——離れたくない」

「分かってるよ」

「あたしたち、いつになったら大人になれるのかな？」

「あと一年だよ」

「そっか」

「でもあたしはそんな答えを望んでいない」

「じゃあ何を求めているんだ？」

「外も見たくなったんだ」

「外」

「うん、でもなんか怖い」

「怖いか」

「だからまだこうしてる」

「俺もだろうな」

「……ねえ」

「何だ」

「二人だけの世界、この夢のような世界から覚めてしまったら、あたしたちはどうなるのかな」

「俺はまた昔みたいに戻るんだろうな」

「そうだよね」

「……お前は、Aは？」

「あたしは——」

「どうした？」

「考えたくない」

「——お前が言い出したんじゃないか」

「あんたがいなくなるなんて考えたくない」

「……」

「やっぱり無理だ」

「そうかな」

「えっ」

「願うことが出来るなら、それはどうにかすれば叶う夢だ」

「そうかな」

「ああ」

「帰ろ」

「分かった」

「なあ」

「ん、何？」

「外と俺、どっちを優先する？」

「あなた」

「即答だな」

「だってあたしがいないと何にも出来ないじゃん」

「だな」

「だし、あたしもあんたがいなきゃダメみたいだから」

「……俺がいなきゃダメ、か」

「うん」

「——俺さ、異性を好きになったのってのは、お前が初めてなんだ」

「……え」

「まともな人付き合い自体が初めてだったからな、距離の取り方に迷いまくってたんだ」

「――」

「でも、全然人並みから外れた俺からもこれだけは言えるよ」

「……何？」

「こんなに距離の近い関係はないって」

「どういうこと？」

「他人、知り合い、親戚、友達、恋人、家族、俺らみたいな」

「それって」

「近すぎるんだよ」

「俺だけじゃないんだぜ」

「……」

「周りを見てみないか」

「……」

「外は広いぞ」

「――そうだね」

「……ああ」

「でもあたし、もうダメなんだ」

「――無理か？」

「うん」

「分かったよ」

「……」

「お休み」

「お休み」

あの人の帰りを、あたしは待っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8631m/>

AとB

2010年10月8日13時55分発行